

日清紡ホールディングス株式会社
「2022年12月期決算説明会」 質疑応答要旨

2023年2月10日に開催した機関投資家向け決算説明会における主な質疑応答をカテゴリー別にまとめました。

無線・通信事業について

- Q1 22年度の業績について、受注の一部が23年度へ繰り越しになったということだが、影響額はどの程度か。 A 70億円程度。電子部品調達の影響が一番大きい。ただ全てが今期へ持ち越しになるかは不透明で、一部は消失する可能性もある。
- Q2 日本政府や大企業の投資意欲について、どう見ているか。ソリューション・特機は、売上高が増える割には営業利益が改善しないようだが、先行投資がかかっているのか。 A 行政として、防災・減災、国土強靱化のための5か年のロードマップを作成している。結果が出てくるのは、新技術の導入などで費用がかかるため、少し先の話になる。また新基幹システムを導入するこのタイミングで、デジタル化による業務の効率化やお客様へのデジタル化の提供などにより、少し先ではあるが利益に貢献するものが見えてくる。
- Q3 マリンシステムが増収減益の計画となっているが、同様の理由か。 A 売上構成の影響がある。大型商船向けは利益率が高くない場合があるが、ワークボート向けなど作業の価値が上がるようなものは高収益を期待できる。
- Q4 モビリティは民生なので、売上高が増加した分が営業利益に効いてくるようなイメージを持てばいいか。 A そのとおりで、量産ものを扱っているので、規模が拡大すればその分だけ利益はついてくる。

マイクロデバイス事業について

- Q5 23年度の売上、利益計画の状況は。 A 22年は民生がトーンダウンしていたが、23年の後半に回復してくるということで増収の計画としている。ただ原材料費やエネルギーコストの高騰が続くであろうことや、昨年のような値上げによるプラスの要因が少なくなるということで、利益は増えない見込み。
- Q6 半期ベースで見た場合、昨年と今年はどうようなパターンになるのか。 A 昨年は値上げ等の影響で上期よりも下期の方が増収、利益は材料費の影響が出てきた関係で上期の増益に比べて下期の増益幅は少なかった。その傾向が続くということで、今年の上期は増収でも利益は増えない。下期に入ると中国スマホを中心とした民生の回復があり、増収・増益を見込んでいる。また昨年は後工程の生産能力が少し不足していて、納期遅れ注残も少し膨らんでいた。今年はその手当を行っていくので、昨年よりも数量増を見込んでいる。
- Q7 車載向けの状況は。 A EV化が進んでいくので昨年同様に好況が続くと見ているが、生産台数が大きく変わるわけではない。車載向けは、売上ベースでは昨年は全体の3割弱だったものが、今年は3割を超えるかどうかといったところに来る。

ブレーキ事業について

- Q8 22年度の業績について、価格転嫁の効果が一部23年度へ持ち越しになったということだが、影響額はどの程度か。 A TMDで原燃料費が110億円ほど上がっており、先期に転嫁できたのが80億円ほどで、残りの30億円を今期に持ち越して転嫁を進めている。顧客との取り決めですぐには効果が現れず、今期になって効果が出てくる部分もある。既に効果は出ていて、TMDは1月に黒字となった。
- Q9 TMDのリストラを進めたということだが、22年度ではどれくらい発生していたのか。 A フランス工場の閉鎖やドイツの拠点集約を行ってきたが、大部分は既に損失計上済みで、先期としては10億円程度。上記の価格未転嫁分30億円、リストラ費用10億円、ロシア向けビジネスが無くなった分が20億円で、合計60億円の赤字要因となった。
- Q10 TMDが単体で関係会社貸倒引当金繰入額を特損計上しているが、事業継続には全く影響がないと理解していいか。 A 2022年度の赤字で債務超過が深まったため、貸倒引当金を追加計上した。ホールディングスが財務支援を行っているのでTMDのオペレーションには影響は出ていない。TMDの債務超過は短期間では問題になることはないが、中長期的な改善に向けて、まずは事業を立て直し黒字を確保することが出発点となる。

化学品事業について

- Q11 燃料電池セパレーターやカルボジライトの需要動向は A 燃料電池セパレーターは右肩上がりに需要が高まっており、新工場を作るフェーズに入っている。2024年末に竣工する新工場のキャパがフルになるのが2025年なのか2026年なのかを判断し、次なる飛躍のための投資判断を来年あたりにしなければいけない。
カルボジライトの需要も増えてきているが、去年はヨーロッパ向けが市況悪化を受けて少し落ちた。それに代わる受注がまた取れてきているので、安定的に増えていくと考えている。

その他

- Q12 プライム市場のPBR1倍割れ銘柄に関して議論がなされているが、お考えは。 A PBR1倍割れが問題なのはそのとおり。我々はきちっと業績の結果を出して、戦略を描いて、IRをしっかり行って訴求していくという地道な活動をこれからも続けていく。